

令和 4 年 7 月 24 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080304
氏名 豊田泰淳

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 オスロ (国名 ノルウェー王国)
2. 研究課題名（和文）：プロティノスの自然学理論
3. 派遣期間：令和 4 年 3 月 28 日 ~ 令和 4 年 6 月 27 日 (92 日間)
4. 派遣先機関名・部局名：オスロ大学 哲学、古典学、美術・思想史学科
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

オスロ大学では、私の主たる研究対象である古代ローマの哲学者プロティノス(A. D. 205-270)に関して、当該分野の世界的権威であるエイヨルフ・エミルソン教授の指導を受けた。私が派遣先機関にて従事したのは、プロティノス哲学の自然学的側面についての研究である。これまでの研究史における蓄積は、プロティノスを含む新プラトン主義的哲学が、物質的な要素を前提とする自然学的理論に関心を向けず、非物質的・精神的な世界を主たる考察対象とするものと考えてきた。近年に至って、以上の偏りを持つ視点の見直しが世界中の研究者により進められている。私の研究内容は、この潮流を引き受けるかたちで、プロティノスにおける物質的世界、すなわち可感的実体の存在性を明らかにすることであった。エミルソン教授との意見交換を踏まえて派遣中に注力した問題は、プロティノスが構想する可感的実体と論理的構成との関係である。この問題点を明らかにし、解決を提案するための具体的な方策として、プロティノスの論攷「存在の類について」における存在論的議論の読解に対し、「ディアレクティケーについて」におけるプロティノスの言語の理解を関連付けることを現在進めている。本研究は、プロティノスが前提としていた言語の論理的構成が、いかなる仕方で彼の可感的実体の存在性の捉え方と関連しているかを明らかにしようとするものである。プロティノスの時代には、アリストテレス以来のペリパトス派的論理学を前提とした言語の理解が他学派にも浸透しており、プロティノスを含むプラトン派もその例外ではなかったと言える。しかしながら、プロティノスはペリパトス派論理学のかなりの部分を受容しつつも、論理学（あるいは言語）と存在論との接点に関してペリパトス派と決定的に袂を分かち、ペリパトス派を批判する中で、彼独自の（新）プラトン主義的存在論を提案しているのだと考えられる。現在は、関連個所のプロティノスによるギリシャ語原典の精査と並行して、同様の問題を先駆的な仕方で取り上げた Strange の研究、及び比較的近年の Chiaradonna による研究の調査を行っている段階である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

上に述べた方針に基づく研究内容は、現在作成中の博士論文の一部を為すものとして構想されたものであり、また博士論文提出に先立って、独立した原稿として学術誌への投稿も計画している。派遣中には、エミルソン教授の指導のもと文献の精査及び成果の執筆を進める中で、オスロ大学の古代哲学研究グループ内にて口頭での研究報告を行う機会に恵まれた。古代ギリシャ哲学を専門とする三人の教授を含むグループ内で構想を発表し、問題点の指摘や議論の質の向上に繋がる助言を受けたことは、内容面での充実につながる貴重な経験であった。この報告会での意見交換を基に、現在英文での論文執筆を進めており、本年度8月に国内学会の英文誌へと投稿予定である。

上掲の Strange による研究 (Strange, S. K. *Plotinus' Treatise "On the Genera of Being": An Historical and Philosophical Study*. Ph.D. dissertation, The University of Texas at Austin, 1981.) は、海外大学に提出された博士論文 (単著としては未刊行) という性質も相まって、国内ではアクセスが困難な文献であり、これまで本邦の研究においては十分に検討されてこなかった。その一方で、欧米における研究では頻繁に引用が為されており、当該書が先駆的に扱った問題点を巡る研究の蓄積が存在することも事実である。今回の在外研究中、エミルソン教授が個人的に所有する当該書を読覧する機会に恵まれ、私自身が構想している計画、問題意識との共通点を数多く発見することができ、現在の研究を進めてゆく上での大きな指針となった。今後は当該書が指摘した問題群及びそれを引き受けた諸研究の調査を行い、ギリシャ語原典との突き合わせを進める中で、プロティノスの言語と存在の捉え方に関する新たな視点を提案し、プロティノスによる可感的実体の理解は軽視すべきでない独自の重要性を有するものだという提案を行ってゆく予定である。この方針は、派遣前から本質的に一貫しており、派遣中の指導を受けてより深化したものである。また、この作業は、本邦において見落とされてきた研究史の一側面を補うという意義も同時に有している。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

私が専門とする新プラトン主義的思想の研究は、国内における研究者の数が少なく、邦語でアクセス可能な文献も限られており、もともと指摘されていた国外の研究水準との差が更に開きつつある分野である。派遣中には、エミルソン教授が主催するプロティノスのリーディングセミナーに参加する幸運に恵まれた。このセミナーは、欧米を中心とする第一線のプロティノス研究者が一堂に会し、ギリシャ語原典での講読を軸として、最新の専門的な哲学的議論を行うものである。そこでは、一流の研究者による哲学的問題の理解やギリシャ語の読み方はもちろんのこと、英語を母国語としない参加者が過半数という母集団の中で英語による専門的ディスカッションを進めるやり方や、参加者それぞれが属する各国の研究・教育状況なども知ることが出来た。当該分野における最新の研究状況に触れ、また同世代を含む研究者のネットワークに参加し、今後も意見交換を行うことの出来る人脈を得たことは、本プログラムへの採用を機に得られたこととして最も大きなものである。

私自身の研究内容に関して、エミルソン教授は研究内容の項目にて言及した問題提起及び研究状況の見直しにいち早く着手した研究者であり、研究計画の相談を行った際も、即座に問題点及び改善点に関するアドバイス、関連する重要な先行研究を提示して下さった。特に、上掲した Strange のものをはじめとするアクセス困難な博士論文を数点閲覧させて頂いたこと、また欧米の一部の図書館にしか所蔵されていない論文集に収録された彼自身の論文のコピーを頂いたことは、国内では得難い研究進捗及び成果をもたらすものである。また、派遣中には定期的に1対1でのギリシャ語原典講読の指導を受け、ギリシャ語原典の解釈を巡る英語を用いた議論の方法を学ぶことが出来た。

現在オスロ大学には広くギリシャ哲学を専門とする専任教員がエミルソン教授を含め5名ほど在籍しており、プロティノス研究に限らず幅広い視点から私の研究計画に関する意見を貰うことが出来た。また、正規の留学生も幅広く受け入れており、世界各国から来た留学生とも哲学的議論をはじめとして交流を行うことで大いに刺激を受け、同時に英語を中心とした非母国語による研究内容の発信を行うことの重要性を痛感した。哲学としての専門性もさることながら、国際的な水準で研究を進めてゆくためには事実上英語での発信に関する技術的な側面を磨いてゆくことが不可欠である。この点を身をもって体感し、改めて自覚的となったことも今回得られたことの一つである。